

第3回レポート問題 (6/20 出題、6/27 締切) の解答

(平成 20 年 7 月 3 日版)

① 導体中でオームの法則が成立している準定常な設定での Maxwell 方程式

$$\mathbf{j} = \sigma \mathbf{E}, \quad \nabla \times \mathbf{B} = \mu \mathbf{j}, \quad \nabla \cdot \mathbf{B} = 0, \quad \nabla \times \mathbf{E} + \frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} = 0 \quad (1)$$

を考えよう。ここで、透磁率 μ と電気伝導率 σ は定数とみなし、導体は無限にひろがっているものとする。

1. 電場がスカラーポテンシャルに依存しないと仮定する (電場の源が、磁場の時間変動によるものだけであるとみなす)。このときベクトルポテンシャル \mathbf{A} が次の拡散方程式に従うことを示せ

$$\nabla^2 \mathbf{A} = \mu \sigma \frac{\partial \mathbf{A}}{\partial t}. \quad (2)$$

2. 無限に広がった空間での拡散方程式 (2) の解は Green 関数による表示

$$\mathbf{A}(\mathbf{x}, t) = \int G(\mathbf{x} - \mathbf{x}', t) \mathbf{A}(\mathbf{x}', 0) d^3 x' \quad (3)$$

で与えられる。ここで、 $\mathbf{A}(\mathbf{x}', 0)$ は時刻 $t = 0$ でのベクトルポテンシャルである。式 (3) の物理的解釈をのべよ。

また、空間変数についての Fourier 変換 ($f(\mathbf{x}, t) = \int \hat{f}(\mathbf{k}, t) e^{i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}} d^3 k$) により式 (2) を解いて、Green 関数が

$$G(\mathbf{x} - \mathbf{x}', t) = \frac{1}{(2\pi)^3} \int e^{\frac{-k^2 t}{\mu \sigma}} e^{i\mathbf{k} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}')} d^3 k \quad (4)$$

となることを示せ。ここに、 $k = |\mathbf{k}|$ であり、 $t > 0$ である。

3. この Green 関数 $G(\mathbf{x}, t)$ は非斉次の拡散方程式

$$\frac{\partial G}{\partial t} - \frac{1}{\mu \sigma} \nabla^2 G = \delta(\mathbf{x}) \delta(t) \quad (5)$$

の解になっている。これを確認してみよう。まず、(5) 式の両辺を時間と空間について Fourier 変換をして ($f(\mathbf{x}, t) = \int \hat{f}(\mathbf{k}, \omega) e^{i(\mathbf{k} \cdot \mathbf{x} + \omega t)} d^3 k d\omega$)、 $\hat{G}(\mathbf{k}, \omega)$ の表式を求めよ。次に周波数 ω についての積分を行うことにより、(4) 式が得られることを確認せよ。

4. 式 (4) の積分を実行して Green 関数が

$$G(\mathbf{x} - \mathbf{x}', t) = \left(\frac{\mu \sigma}{4\pi t} \right)^{3/2} \exp \left(\frac{-\mu \sigma |\mathbf{x} - \mathbf{x}'|^2}{4t} \right) \quad (6)$$

と表せることを示せ。(これは境界のない 3 次元空間中の拡散方程式の Green 関数である。拡散方程式は熱伝導方程式とも呼ばれ、この Green 関数は熱核 (heat kernel) と呼ばれることもある)。

5. 時刻 $t = 0$ に $\mathbf{A}(\mathbf{x}, 0)$ がゼロでない領域が局在しているとしよう。この局在している部分を原点のまわりに大きさ d の領域として、原点から遠く離れた点 \mathbf{x} ($|\mathbf{x}| \gg d$) で、この場の時間変動を観測する。この時間変動には、3 つの振舞いがあることを示し、それぞれの振舞いが観測される時間帯を $0 < t \leq T_1$, $T_1 \leq t \leq T_2$, $t \gg T_2$ とするときの T_1, T_2 を与えよ。最後の時間帯ではベクトルポテンシャル $\mathbf{A}(\mathbf{x}, t)$ は近似的にどう表されるか?

1. 仮定から $E = -\partial A/\partial t$ であるので、 $\nabla \times B = \mu j = \mu\sigma E$ より、 $\nabla \times (\nabla \times A) = \mu\sigma(-\partial A/\partial t)$ である。 $\nabla \cdot A = 0$ とゲージを選ぶことによって拡散方程式を得る。
2. 式 (3) の物理的解釈は、左辺の時刻 t 、位置 x でのベクトルポテンシャルが、過去の時刻 $t = 0$ 、位置 x' でのベクトルポテンシャルの影響が積分核 $G(x - x', t)$ を通じて決定される、ということである (全ての位置 x' からの影響があるはずなので、 x' について積分されている)。

次に Green 関数の表式であるが、まず、 $A(x, t)$ を空間について Fourier 変換して、拡散方程式を解くことから初める。

$$A(x, t) = \int \hat{A}(k, t) e^{ik \cdot x} d^3 k$$

を拡散方程式に代入すると、

$$-k^2 \hat{A}(k, t) = \mu\sigma \frac{d\hat{A}(k, t)}{dt}$$

となる。この解は、 $\hat{A}(k, t) = \hat{A}(k, 0) e^{-k^2 t / (\mu\sigma)}$ から、

$$A(x, t) = \int e^{-\frac{k^2 t}{\mu\sigma}} \hat{A}(k, 0) e^{ik \cdot x} d^3 k$$

となる。一方で、Green 関数を用いた解の表現で、 $G(x - x', t)$ 、 $A(x', 0)$ を Fourier 変換表示することによって、次のような表現を得る。これらを比較すればよい。

$$\begin{aligned} A(x, t) &= \int \left[\int \hat{G}(k, t) e^{ik \cdot (x - x')} d^3 k \right] \left[\int \hat{A}(q, 0) e^{iq \cdot x'} d^3 q \right] d^3 x' \\ &= \int \hat{G}(k, t) \hat{A}(q, 0) e^{ik \cdot x} \left[\int e^{i(q - k) \cdot x'} d^3 x' \right] d^3 k d^3 q \\ &= (2\pi)^3 \int \hat{G}(k, t) \hat{A}(q, 0) e^{ik \cdot x} \delta(q - k) d^3 k d^3 q \\ &= (2\pi)^3 \int \hat{G}(k, t) \hat{A}(k, 0) e^{ik \cdot x} d^3 k \end{aligned}$$

以上の比較によって、

$$\hat{G}(k, t) = \frac{1}{(2\pi)^3} e^{-\frac{k^2 t}{\mu\sigma}}$$

となるので題意を得る。

3. 時空間の Fourier 変換によって、非斉次の拡散方程式は次のようにかける。

$$\int \left(i\omega + \frac{k^2}{\mu\sigma} \right) \hat{G}(k, \omega) e^{i(k \cdot x + \omega t)} d^3 k d\omega = \frac{1}{(2\pi)^3} \int e^{ik \cdot x} d^3 k \times \frac{1}{2\pi} \int e^{i\omega t} d\omega$$

これから、 $\hat{G}(k, \omega) = \frac{1}{(2\pi)^4} \frac{1}{i\omega + \frac{k^2}{\mu\sigma}}$ である。周波数についての積分は、複素積分で経路を実軸を通り、孤立特異点 $\omega = ik^2/(\mu\sigma)$ を囲む $\omega > 0$ での半円で半径を無限大にすることにより計算できる。すなわち、

$$\hat{G}(k, t) = \int \hat{G}(k, \omega) e^{i\omega t} d\omega = \frac{1}{(2\pi)^4} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{-ie^{i\omega t}}{\omega - i\frac{k^2}{\mu\sigma}} d\omega = \frac{1}{(2\pi)^3} e^{-\frac{k^2 t}{\mu\sigma}}$$

となって確かに (4) 式と一致する。

4. (4) 式の指数関数の引数を平方完成して Gauss 積分にもちこめばよい。すなわち、

$$-\frac{k^2 t}{\mu\sigma} + i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x} = -\frac{t}{\mu\sigma} k_j^2 + ik_j x_j = -\frac{t}{\mu\sigma} \left(k_j - i\frac{\mu\sigma}{2t} x_j \right)^2 - \frac{\mu\sigma}{4t} x_j^2$$

であるので、

$$G(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{(2\pi)^3} \exp\left(-\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}|^2\right) \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} \exp\left[-\frac{t}{\mu\sigma} \left(k - i\frac{\mu\sigma}{2t} x \right)^2\right] dk \right\}^3 = \frac{1}{(2\pi)^3} \exp\left(-\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}|^2\right) \left(\frac{\pi\mu\sigma}{t}\right)^{3/2}$$

となって題意を得る。

5. Green 関数を用いた表式は、

$$\mathbf{A}(\mathbf{x}, t) = \left(\frac{\mu\sigma}{4\pi t}\right)^{3/2} \int \exp\left\{-\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}|^2 \left[1 - 2\frac{\mathbf{x} \cdot \mathbf{x}'}{|\mathbf{x}|^2} + \frac{|\mathbf{x}'|^2}{|\mathbf{x}|^2}\right]\right\} \mathbf{A}(\mathbf{x}', 0) d^3 x' \quad \dots (*)$$

である。指数関数引数の [] の中身は $|\mathbf{x}'| \simeq d \ll |\mathbf{x}|$ であるので、右に行けば行くほど小さくなる。ただし $1/t$ がかかっていることに注意すると、一番小さい筈の第 3 項が無視できないのは、

$$\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}'|^2 \simeq \frac{\mu\sigma}{t} d^2 > 1$$

であるときである。つまり $0 < t \leq \mu\sigma d^2$ では [] の中身の全てを考慮する必要がある。次に、[] の中身で、第 3 項は無視できるが、第 2 項は無視できない時間帯がある。それは、

$$\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}'|^2 \sim \frac{\mu\sigma}{t} d^2 < 1$$

かつ、

$$\frac{\mu\sigma}{2t} \mathbf{x} \cdot \mathbf{x}' \sim \frac{\mu\sigma}{t} d|\mathbf{x}| > 1$$

が満たされるので、 $\mu\sigma d^2 \leq t \leq \mu\sigma d|\mathbf{x}|$ である。時刻が $t \geq \mu\sigma d|\mathbf{x}|$ では、[] の中身で、第 2, 3 項が無視できる。

以上をまとめると、 $T_1 = \mu\sigma d^2$, $T_2 = \mu\sigma d|\mathbf{x}|$ である。まず $0 < t \leq T_1 = \mu\sigma d^2$ では、観測点 \mathbf{x} でベクトルポテンシャルは (*) 式のように振舞う。次に $T_1 \leq t \leq T_2 = \mu\sigma d|\mathbf{x}|$ では観測点 \mathbf{x} でベクトルポテンシャルは近似的に

$$\mathbf{A}(\mathbf{x}, t) \simeq \left(\frac{\mu\sigma}{4\pi t}\right)^{3/2} \int \exp\left\{-\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}|^2 \left[1 - 2\frac{\mathbf{x} \cdot \mathbf{x}'}{|\mathbf{x}|^2}\right]\right\} \mathbf{A}(\mathbf{x}', 0) d^3 x'$$

のように振舞う。さらに、 $t \geq T_2$ での近似的な振舞いは、

$$\mathbf{A}(\mathbf{x}, t) \simeq \left(\frac{\mu\sigma}{4\pi t}\right)^{3/2} \exp\left(-\frac{\mu\sigma}{4t} |\mathbf{x}|^2\right) \int \mathbf{A}(\mathbf{x}', 0) d^3 x'$$

となる。